

ばれいしょ品種考

農研機構 種苗管理センター 所長 てらだ 寺田 ひろみき 博幹

新しい品種が華々しくデビューし、農家の収益があがり、作付けが拡大し、そして市場を席巻する。そういったポジティブ・フィードバックを生み出す力が品種にはある。

例えば、平成8年に品種登録が行われたイチゴの「とちおとめ」は、平成16年以降作付シェア全国一となっているが、収量性や耐病性などを改善した後継品種も育成されてきている。

また、水稻の「コシヒカリ」(1956年、昭和31年)では耐病性が改善された「コシヒカリBL群」が2005年(平成17年)から市場に現れており、同じ「コシヒカリ」として流通している。「コシヒカリ」総体としての地位は今しばらくは盤石のようである。

一方、ばれいしょ品種でみると、男爵薯、トヨシロ、メイクイン、コナヒメ、コナユタカ、これらは農研機構種苗管理センターが平成30年度に配布したばれいしょの原原種トップ5である。皆様をご存じのように男爵薯、メイクインは我が国への導入後、百年を超える品種である。古い品種だから悪いといっている訳ではない。古い品種なりの栽培技術の改良、レシピの充実、ブランドの形成など、様々な取組が継続され、現在の栽培・流通が支えられている。しか

し、病害抵抗性、特に、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性がないといった弱点も抱えたままである。

ジャガイモシストセンチュウ抵抗性を有する新たな品種も増加してきているし、ポテトチップス等加工原料用の品種が育成されるなど、近年、多数の品種が世にでてきている。

種苗管理センターが配布する品種数は、1986年(昭和61年)に20品種であったものが、2018年(平成30年)には86品種と四倍以上になっている。育成系統の増殖のお手伝いも加えると平成30年には139品種と、とてつもない数の品種を種苗管理センターは取り扱っており、ばれいしょ生産体制の上流(種苗管理センター、原種生産者、一般種苗生産者)の負担感が増している。

ほかの産地と違ったもので市場に評価されたい、多くの消費者に認知されている品種を作り続けたいなどといった取組も悪くはないが、輸入量は増加していることを踏まえ、複数の産地が一緒になり「男爵薯」や「メイクイン」に変わる品種を新たなブランドとして大きく育てていくことで、国産シェアの回復を図り、ばれいしょ生産体制の上流から下流までが一体として発展していくことを期待したい。